

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 16 日現在

機関番号：16201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K22242

研究課題名(和文)自己評価能力を育成し、子供が自立した学習者として学び続ける道徳科授業モデルの構築

研究課題名(英文)Fostering self-evaluation skills and building a moral lesson model in which children continue to learn as independent learners

研究代表者

清水 顕人(Shimizu, Akihito)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：00882747

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、小学校高学年の3学級において授業実践と観察を行った。子供自身が、対話を通して、評価の視点に沿って学びを振り返ることができる1単位時間の道徳科の授業を構想・実践し、課題を明らかにした。そして、その課題を改善するために、他者からの評価が書かれた付箋を受け取り、自己を振り返ることができるようにした。改善した授業を実施した後、質問紙調査を実施した。授業実践と、質問紙調査から、以下の結果を得た。付箋を用いることによって、子供自身が学びを振り返るための交流が短時間で効果的に行われることや、付箋による他者からの評価を受け取ることが学びの振り返りを深めることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子供が自分自身の学びを振り返る自己評価能力の育成を目指した道徳科授業の成立について、振り返り場面で付箋を用いることの効果が示唆されたことが社会的意義につながると考えられる。付箋を用いることで子供自身が学びを振り返るための交流が短時間で効果的に行われることや、付箋による他者からの評価を受け取ることが学びの振り返りを深めることは、今後の授業改善に資するものとなる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we practiced and observed lessons in three classes in the upper grades of elementary school. I conceived and practiced a moral lesson that allows children to reflect on their learning through dialogue from the perspective of evaluation, and clarified the issues. In order to improve the task, they received sticky notes with evaluations written on them from others so that they could reflect on themselves. After the improved class was implemented, a questionnaire survey was conducted. The following results were obtained from class practice and questionnaire survey. By using sticky notes, it was found that exchanges for children to look back on their own learning are carried out effectively in a short period of time, and that receiving evaluations from others by sticky notes deepens the review of learning.

研究分野：道徳教育

キーワード：道徳科授業 自己評価 振り返り 対話 付箋 他者評価

1. 研究開始当初の背景

道徳が教科化され、評価については「数値などによって不用意に評価しない」「子供の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉え、個々の児童の成長を促す評価を行う」ことなどが求められている。学校現場では、授業の質的変換を図る取組とともに、具体的な評価方法の検討・蓄積が進んできた。そして、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価、エピソード評価等の様々な道徳科の評価に関する研究成果も報告されている。

一方で、評価のための資料収集自体が目的化していることへの指摘や、「指導も評価も教師の行為と位置づけられていることに課題がある」とする西野(2020)の指摘も見られる。さらに岡田(2016)は、自己調整学習における評価の役割について述べる中で、「教師は、児童生徒の能力や達成度を適切に評価しながら、児童生徒が自ら学習を調整するための自己評価ができるように、しだいに評価の主体を譲り渡していくことが必要」としている。つまり、学習の主体者である子供たち自身が評価を行う学習が求められていると言える。したがって、道徳科において、評価を子供自身の行為として位置付けた授業を実現するために、子供の自己評価能力の育成に資する道徳科の授業の在り方を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

本研究では、自己評価における2つの視点「対話や協働を通して、一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展したか(視点1)」「道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めたか(視点2)」に沿って子供自身が学びを振り返ることのできる1単位時間の道徳科の授業を構想・実践した。その後、明らかとなった課題に対し、他者評価を取り入れて自己を振り返ることができるように改善した授業を構想・実践し、授業改善を図った。これら2段階の構想と実践を通して、子供が自分自身の学びを振り返る自己評価能力の育成を目指した道徳科授業の成立につながる実践的示唆を得ることが本研究の目的であった。

3. 研究の方法

(1) 授業実践1と観察

2020年11~12月に授業実践1を行った。大学の附属小学校の6年生1学級(34名)で2教材2時間、5年生1学級(34名)で3教材3時間の道徳科の授業を実施した。いずれも、担任が授業を行い、映像で記録した。グループでの対話の記録は、各グループに360度カメラを設置し、対話の様子を音声と映像で記録した。一般的な道徳科の学習指導過程である導入、展開、終末の各段階に区分して学習活動を構想・実施した。終末段階の振り返り場面では2つの評価の視点を含む「振り返りの視点」を示すようにし、振り返りに対する対話の機会を設定することが子供たちの自己評価能力の育成につながると仮定した。

(2) 授業実践2と観察

2021年9月に授業実践2を行った。大学の附属小学校の5年生1学級(35名)において1教材1時間の道徳科の授業を実施した。担任が授業を行い、映像で記録した。グループでの対話の記録は、各グループに360度カメラを設置し、対話の様子を音声と映像で記録した。先の授業実践と観察1の結果を受け、授業者と相談しながら学習指導過程における終末段階の見直しを行った。変更点は、終末段階の2回の自己評価の間に、対話に替えて付箋による交流を実施するようにしたことである。

(3) 質問紙調査

授業実践2の後に質問紙調査を行い、「友達から付箋のメッセージをもらって感じたこと・よかったこと」について回答を求めた。回答は自由記述とし、35名から回答を得た。記述内容はKHコードを用いて共起ネットワークとして作成し、データの中に多く現れたテーマを読み取った。

4. 研究成果

(1) 授業実践1と観察

5教材を用いた各授業の動画記録を確認したところ、終末段階の振り返りの発言の中で、視点1や視点2に沿って振り返ったことを発言できていると判断できた人数の割合は、「視点1」では3~15%、「視点2」では41~67%であった。視点1の判断基準は、例えば「~さんの意見を聞いて」「~という意見がよかった」といった、他者の考えを取り入れている発言や、他者への質問を含む振り返りの発言などである。視点2の判断基準は、例えば「自分なら~する」「~できる人になりたい」といった自分の判断やこれからの目標を含む発言、「障害のある人に接する際には~」「妹に対して~」といった教材から離れた自分に身近な具体的な場面の中で考えている発言、「これまでの自分は~だったけれど、これからは~」と自分を振り返ってこれから先の目標を明らかにしている発言などである。

また、対話の途中で他者の考えのよさを伝え返している発言や、新たな問いが生まれて他者に問いかける発言、他者の考えを聞いて自分のノートに加筆していく様子など、対話により考えの深まりにつながったと判断できた人数の割合は、0～45%であった。

視点1に沿って発言する子供が少なかった要因として、視点1を意識し、振り返りに表出することの難しさがうかがえる。友達の考えのよさに気付いて最終の振り返りに生かしている子供は、結果の割合ほど少なくはないと考えられるが、自分の考えに影響を与えた他者の発言を記憶しておくことは難しいと推察される。視点1よりも視点2の割合が高かったのは、日頃の授業が視点2の振り返りに沿って行われているからだとして推察される。

また、終末段階の対話場面において、視点1、2のいずれの振り返りも発言できなかった子供がいることも明らかとなった。要因としては、発言することに苦手意識をもっている子供がいると推察される。それから、4人のグループ内で固定化した2人が常に話している状況などからは、口頭で他者に意見を伝えるに固定化した子供の人間関係が障壁となっていることも推察される。教師がグループに声をかける場面も見られたが、短時間では全グループ数の半数以下のグループにしか関わっていない(平均2～3グループ)実態も明らかとなった。教師が声をかけたことによって、既にグループ内で発言したことを再度教師に伝え直す様子や、子供の対話が中断する様子も見られた。終末段階で教師が肯定的な声をかけ、再度の振り返りで自らの良さや可能性に気付くようにするという支援の限界であり、子供の対話に教師が入っていくことの難しさを示している。以上のことから、振り返りに対する対話の機会を設定するという構成において、次の課題が明らかとなった。「自己の考えに影響を与えた他者の発言を記憶・自覚することの困難さ」「対話が苦手な子供への支援」「固定化した人間関係に左右されない交流の方法」「教師の直接的な声かけの限界を自覚し、子供同士の他者評価を促すこと」の4点である。

(2) 授業実践2と観察

1グループを抽出し、4人の対話や振り返りの記述、付箋の内容を分析した。子供たちは付箋を書く際に相手の考えの良さに気付いていることが分かった。例えば、B児は、A児に対して、A児の考えに納得していることを付箋に記述している。そして、B児は付箋を受け取った後の振り返りに対して、そのA児の考えの良さを自分の考えに取り入れていることが記述から読み取れた。視点1を意識して友達の考えの良さを見つけようとしている様子が見られた。

付箋を渡すことで、相手の考えの良さは消えることなく記憶され、自分の振り返りに取り入れようとするのは、視点1に基づく振り返りであると言える。また、互いの振り返りを読み合うことで効率的に交流できたが、グループの全員に付箋を書くことができず、一人だけに付箋を渡すことができた子供もいた。これは、その子供の普段の様相から、書くことへの苦手意識によるものであったと推察される。付箋を用いることで授業実践1における課題を改善することにつながったが、書くことへの困難さを抱えている子供にとっては口頭で伝える方がよかったと考えられる。

(3) 質問紙調査

また、授業後に実施した質問紙調査の回答結果について、KHコードを用いて共起ネットワークを作成したところ、特徴的な～のグループが出現した。3つのグループ、～、～について、関連する回答記述を読み返すと、～からは、「友達からメッセージをもらえること、自分のよさへの気づきなどが、うれしさにつながっている」ことが、～からは、「自分の書いた振り返りに対して、自信をもつことができる」ことが、～からは、「友達の意見を受けて、自分の考えの深まりを実感できる」ことが読み取れた。1回目の振り返りを互いに読み合い、それに対する友達への意見を記述した付箋を渡し、受け取った付箋の記述を読み、再度、自らの学びを振り返るという過程における良さが、～に示されており、付箋が振り返りを深める他者評価となっていることが推察された。そして、道徳科の自己評価における前提である「子供が自身のよさや可能性に気づくもの」ということにも合致していると言えるだろう。つまり、付箋による他者評価によって、より質の高い自己評価を促せることが示唆されたと言える。

(4) 総合考察

本研究の目的は、子供が自分自身の学びを振り返る自己評価能力の育成を目指した道徳科授業の在り方を明らかにしていくことであり、1単位時間の道徳科の授業の構成について検討してきた。そして、子供が学びを振り返る終末段階の学習活動に焦点を当て、振り返りについてのグループ対話を設定して再度の振り返りを行うことで、他者評価を取り入れたより質の高い振り返りが行われると仮定した。しかし、振り返りについての対話には「自己の考えに影響を与えた他者の発言を記憶・自覚することの困難さ」「対話が苦手な子供への支援」「固定化した人間関係に左右されない交流の方法」「教師の直接的な声かけの限界を自覚し、子供同士の他者評価を促すこと」の4点の課題が明らかとなった。そこで、終末段階の振り返りの対話を、付箋を用いた交流に変更したところ、評価の視点1に基づく振り返りが見られるようになり、口頭で伝える対話よりも短時間で充実した交流が可能となった。そして、授業後の質問紙調査の記述内容から、付箋を用いた交流が、道徳科の自己評価における前提である「子供が自身のよさや可能性に気づくもの」につながる可能性も示唆された。このように、評価の視点を意識した振り返りを行い、付箋を用いた他者評価を取り入れて、更に自分の学びを振り返る授業の構成が、子供の自己評価

能力の育成につながると考える。

最後に研究の課題を2点挙げる。1点目は、本研究で明らかとなった授業構成に基づくさらなる授業実践と観察、分析である。本研究の結果は、小学校5、6年の3学級のみを対象とした授業実践から得られたものである。今後は、より多くの授業実践の結果を検証し、さらに授業を改善していく必要がある。2点目は、子供の人間関係の検討である。本研究では、固定化した人間関係そのものの影響を把握したり改善したりしていない。学級文化ともいべき子供同士の関係性の在り様が対話にどう影響するのかを研究し、対話による振り返りの交流について研究する必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 清水顕人
2. 発表標題 子供の自己評価能力の育成を目指した道徳科授業の在り方について
3. 学会等名 日本道徳教育学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

〔研究成果報告・リーフレット〕（計1点） 清水顕人.（2022）.自己評価能力を育成し、子供が自立した学習者として学び続ける道徳科授業を目指して（香川県下全小・中学校、教育委員会等関係機関に発送済み）

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------